
俺を好きになってよ！

久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺を好きになってよ！

【Nコード】

N2194Q

【作者名】

久

【あらすじ】

自他共に認める美少年、瑞樹^{みずき}は二十歳にして恋を知り、そして玉砕した。親友とすら呼べる空^{そら}に。空が男だと分かっていながら…そして空は幾重にも秘密を持った存在だった。同性愛に悩む事なくうざいくらい前向きな瑞樹と、彼の恋心を知りながら変化のない空。癖のある人々が繰り広げるラブコメです。BL苦手な人間が書くなんちゃってBL…？

プロローグ

「ごめん。瑞樹のことは友達としてしか見れない。好きな子がいるんだ」

俺にとっては一世一代の告白。その返答は随分前に型落ちした携帯にも入っていきそうな定型文だった。

仲野瑞樹、二十歳。生まれて初めての告白は寸分の迷いもなく一刀両断。四月だというのにひどく肌寒い春の午後、恋した人の前で号泣しそうである。あ、ホントに涙出そう。

コンビニのバイトで知り合って二年。週末も二人だけで頻繁に遊びに行く仲だ。

ちよっとだけ。ほんのちよっとだけだが可能性があると思っていた。他の奴らより距離は近い。俺以外には二人だけで行動する奴は居ないし多少なり好意を持ってもらっていると思ってた。それが友情だったとしても、この告白に少しは悩んでくれるだろうと思ってたのに。

俯くと涙が出そうだったので目の前の綺麗な顔を凝視する。

少しだけ困ったように寄せた眉。切れ長の双眸が情けない表情の俺映し、薄い唇には緩い笑みが宿っている。艶やかな黒髪がさらさらと揺れていた。すらりとした肢体。ごく普通の一般市民だと知っているが醸し出す雰囲気はどこか高貴で侵し難く、芸能人オーラというのはこういうものなのだろうと思う。そこに居るだけで空気がまるで違うのだ。

目の前にいる恋しい人は、ただただ美しかった。

「でも俺、瑞樹のこと好きだから、これから友達で居てくれるか？」

あ。紹介が遅れました。

俺の初恋の人、眞野空^{まのそら}。自分のことを俺なんて呼んじゃうちよつとアレな女の子ではなく。

俺より長身で、とっても綺麗な美青年である。

よりもよって初恋相手が同性とは、俺も本当に救いがない男だと思う。分かってるから放っておいてくれ。

心底情けなくなった俺は、とうとう、涙を一筋流してしまった。

1話

俺は（自分で言うのもどうかと思うが）自他共に認める美少年だ。

二十歳にもなった成人男子が自己申告で美少年とは、と笑うかも知れないが、アルコールを買う時に顔をしかめられる童顔で（厳しい人には身分証明書を求められた）高校生にしか見られない。

雑誌のスナップにも何度も載ったし（イケメンとかカッコイイとかいう煽りは一度も付けて貰った事はないが）スカウトも数え切れないほどに受けた。両親が厳しいので芸能活動は無理だと断り続けているが、某大手アイドル事務所にも声を掛けられた事があるほどだ。

ちよつと調子に乗ってしまうほどの容姿である。ホントすみません。

そりゃまあ、勿論モテるわけで。ほとんど年上だけだ。

女の子は勝手に寄ってくるので自分から声を掛けたりしたことがない。好きと言われれば悪い気はしないので、それなりに色んな子とお付き合いしてきた。だけど、どの子も好きだが執着するほどではなくて、別れを告げられても簡単に手を振った。数々の彼女たちに恋をしていなかったのだとつくづく思う。

それが。まさか俺が。

男相手に初恋だなんて。

初めて会った時は凄く綺麗な男だなあという感想しかなかった。侵し難い空気は無意識に人を遠ざけていたし、深夜のコンビニでバイトするようには全然見えない。

それが意外にも話し易く、本の好みがぴったり合って驚いた。もっと高尚な日本文学とか好みそうな容姿だったから、本人にそう言ったら普通に漫画も読むしゲームもすると笑ったつけ。

好きな漫画が原作の映画を観に行ったり、実は好きなバンドまで一緒にチケット争奪戦に参加したりした。

そうこうしているうちに、俺の中で恋心が芽生えたのである。

綺麗な笑顔が見れると、その日一日が死ぬほど幸せだったり、彼から貰った缶コーヒーが専門店のものより美味く感じたり。

空からのメールを見てニヤニヤして俺は当時付き合ってた彼女に浮気を疑われたが、メールの相手が空だと分かると（彼女はコンビの常連だったので空のことも知ってた）キモイと言って去って行った。メール一つに一喜一憂していた俺は、本当に気持ち悪かったと思う。妹に、お前は恋する乙女か、と辛辣に突っ込まれ、それで恋を自覚したと言わない、うん。

「俺、本気なんだよ！冗談とかじゃなくて」

俺が必死になってこの情熱を伝えようとすると、空はやんわりと笑んで分かっているよと答えた。

「瑞樹がこんな冗談言ったりする奴じゃないくらい分かってるよ。ありがとう」

ぼん、と俺の肩を叩く。同じ男のくせに滑らかでほっそりとしたその手が、そのまま俺の髪を撫でていった。

尋常じゃない胸の高鳴りに全身が真っ赤になる。

「可愛いと思ってるよ」

でもそれは愛玩物を見る眼だ。相手の全てを渴望するような、俺と同じそれではない。

「でも、恋じゃない」

「……分かった」

「瑞樹のことは好きだからね？」

「泣くからやめて」

優しくされるとホント泣くよ？マジで。

自宅に戻った俺は、リビングから聞こえる母親の声に返事も出来ず自室のベッドに沈んだ。

一世一代の告白の後…空はまるでそれまでのやり取りが無かった事のように

「そうそう。これ、新刊出たから持ってきた」
と笑顔で三冊の漫画を貸してくれました。

泣いて逃げ出さなかった俺を誰か褒めて。

いや、だが。

「んん、ふふふふ」

俺は枕に顔を押し付け笑いを零した。これが笑わずにいられるか！

空からの返事で俺が予想していたのは三つ。

まず、最悪のケースだが一番ありえるのが『その気はない』とはつきり言われて気持ち悪がられ、友達としても一緒に居れなくなるのだ。最高のケースは『実は俺も…』だが、普段の空が俺を見る目からもその確率は相当に低かった。

そして『好意は嬉しいが友達のままで』だ。空は出来た人間なのでこのケースも確率は高かったが、それでも多少はよそよそしくなるだろうと覚悟していた。

少しでも俺を意識してくれたらとりあえずは良いと思ったのだが…

「うおおお！！」

リビングから「瑞樹！」と、俺の騒音を咎める母親の声が聞こえた気がするが完全無視！

雄叫びを上げること以外で、この歓喜をどうやって表現しろというんだ！

あのふつつつの態度！俺の恋心を知ったというのに今まで通りのあの態度！

今まで通り接してくれつつも、俺の恋心を何の差別なく受けてくれたという事は、ちょっとは対象として見てくれるということだ！

間違いなく!!

希望が、希望があるっ！

女の子が羨むこの容姿だ。いつそ空の好みに女装とかしちゃえば良いんじゃないだろうか。空が望むなら手術も考えてみよう。

「頑張る！俺、頑張る!!」

「うっさいよ兄貴」

文句を言いに来た妹の冷やかなツツコミも耳に届かず、俺は一人やる気に満ちていた。

「兄貴の無意味なポジティブさ、マジうざい」

俺より男らしいと言われる妹は鋭く舌打ちした後、俺が聞いていないと分かると深々と嘆息した。

2話

「はい」

「…あんがと」

どういたしましてと。

いつも当たり前障りのない仮面のような微笑を張り付けている空の表情が緩く笑んだ。

思わず見惚れる美しい笑み。

手渡されたジュースのストローに口を付け、隣に座った空をこそりと盗み見る。スクリーンに流れるアクション映画の予告を涼やかに観ている彼は、その隣に座っている年上女子の視線を独占しているが特に気にした風はない。

見目好い男が二人きりで映画なんて、彼女はいないのかしら、とその期待に満ちた視線が語っていた。

その視線が面倒で、俺は気付いてない素振りでスクリーンに視線を固定させた。

すらりとした肢体の金髪美人が銃口をこちらに向け、スタント無しだというアクションを披露している。

ずっと好きだった女優だが、隣に空が居ると思うとスクリーンよりも気は隣に向かってしまう。

重症だ。

深々と息を吐き出してから椅子に沈む。

「よくチケット取れたよね。相変わらず強運」
「まあね」

上映終了後に監督と主演の人気俳優たちが並ぶ舞台挨拶が当たったのは何回目か。今回は相当倍率が高かったらしい。大学の友達連中も申し込んだらしいが、当たったのは俺だけだ。

こういう運は相当強い。ライブでチケットを取れば中央一列目。箱の時は整理番号一桁とかざらだし、悪くても百より前だ。宝くじとか金銭が絡むものは当たった試しはないが。

告白から二日。

空の態度は想像以上に普通で今まで通り。俺を意識することも避ける気配もない。

嬉しいような悲しいような。

正直、若干凹む。

「皆様お待たせ致しました」

甲高い声を上げて現れたのはそこそこの知れた女子アナ。観客たちは歓声と拍手を持って彼女を迎えたが、俺はそのまま臉を落とした。

「ヒロイン役の子可愛かったなあ」

「そうだね。イメージ通りって感じだった。これから売れるだろうね」

俺がぼんやりと呟いたのを空は聞き逃さずに頷いた。

映画の後は飯を食べながら感想を話すのが恒例だ。カニのクリームパスタをくるくるとしながら、通りを歩く人々に視線を投げる。

映画の出来は中々だった。あの原作漫画の世界観を良く表現したな、と二人で感心する。

何より、ほわっほわで世間知らずのヒロインを演じた女優がバツチリハマッていた。

映画終了後に出て来た本人は、凜とした美少女でそのギャップもまた良かったなあ。

空はべらべらと喋るタイプではないが、聞き上手で会話が止まる事はない。俺がよく喋るというのもある。

あっという間に二時間が過ぎ、いい加減帰るか、と席を立った時だった。

「空」

ほわんと柔らかい女の子の声。それに呼び止められた空は凄い勢いで振り返った。

セミロングの緩いパーマがよく似合うほんわり系美少女。あのヒロインがそのままそこに居るような空気。

ぱつちりと大きな双眸に自前と思われる長い睫毛。

背は標準より低く手足が細くて華奢。めちゃくちゃ男受けするタイプだ。庇護欲をそそられる。

（外見だけならうちの妹も同じくらいのレベルだが、中身が物凄い残念な娘なのでナンパはよくされるが彼氏は出来ない。粗暴という言葉がしっくりくる）

知り合いか、と空を見遣って俺はぎょっとした。

「みい」

甘ったるく彼女の名を呼んで、破顔、と言って良い程に表情を緩めていたのだ。

こんな表情、今まで見たことない！

彼女の隣に居た友人らしき子は真っ赤になって空に見惚れている。

俺は確信した。彼女が空の想い人だと。

彼女を見る空の視線。目の前の人に恋焦がれる、俺と同じ瞳。それを彼女は平然と受けて流す。気付いていないのだろうか。

「偶然だねえ。帰るトコ？」

「ああ。映画の帰り」

「そちらは…お友達？」

「同じバイト先の友達。瑞樹」

彼女は俺をじっと見てからにこりと笑んだ。

「はじめまして。空がいつもお世話になってます」

まるで奥さんみたいな挨拶に、俺の胸はギリリと痛んだ。身内のような挨拶が出来る関係なのか。慣れた空気からも長い付き合いなのだと見て取れた。

愛想よく笑ってこちらこそ、と言ったつもりが、微かに声が震えている。きつと笑顔も引き攣っているに違いない。

ほわわつと笑んだ彼女は信じられない一言を放った。

「姉の海です」

……『うみ』で『みい』か。

ん？

え？

「あ、ね？」

「もう、またこの反応！どうせ下にしか見えないって言うんでしょ？！双子で同じ年でも姉は姉ですっ！」

自分の魅力を最大限に引き出そうと思ってやっているのだとすれば彼女は天才だ。僅かに頬を膨らませ、上目使いに睨んでくる彼女はそれはそれは愛らしい。

俺の好きな人の想い人は女の子らしい美少女で。
その美少女は全然似てない双子の姉。

姉。

義理の、ではなく血の繋がった姉。

どの問題から片付けるべきか。

俺の思考はフリーズ寸前でそれだけを導き出した方がいいが、それ以上の機能を果たせそうもなかった。

3話

目の前で美少女が頬を膨らませている僅かな間、見た目には活動停止している俺は目まぐるしい早さで脳を活動させていた。

自分の好きな人が実の姉だから、タブーであるはずの俺の告白を『嬉しいよ』程度で流し、その後も普通に接する事が出来たのか。その姉は自分へ向けられる恋心には気付いていない。まさか、弟が恋愛対象として自分を見ているなんて思わないだろう。俺も妹がそんな目で見ているなんて思わないし、逆も然り。お互い『キモイ』と言う。間違いなく。

抱いてはいけないという想いを一体どれほどの間抱えていたのかは分からないが、空は俺のタブーをあっさりと許せるほどの痛みを抱き続けていたのだ。

報われないその想い。

ぐっと胸が詰まる。空の痛みなど、俺とは比べものにならないのだろう。

ならば。

俺を好きにさせればいいのだっ！

確かにこの子は可愛いが、ちょっと手入れすれば俺の女装もこれくらいイケるのではないだろうかっ！趣味も合うし、相性はいいに違いない！

俺は決意した。

空を苦しい恋から解放するためなら何だってしてみせると！

にっこりと笑顔を作ってからごめんね、と俺は眉を寄せた。

「空にこんなに可愛いお姉さんが居るなんて知らなかったし」

隠してるなんて酷いなあ、と俺が空の腕を突くと、彼は珍しく眉根を寄せて小さく笑んだ。何かに苛立っていると感じたのは間違いじゃない。

何かにじゃない。俺にだ。

俺はずきりと胸を痛め、縋るように空を見上げた。

「ごめん、この後約束があるから帰るよ」

行こうか、と声を掛けられて慌てて後を追う。長い脚がゆっくりと先を歩き、振り返ってから柔らかな笑みを向けた。

「遅くならないようにね」

「空もね！」

俺も会釈だけ残してその場を後にした。

「…ごめん」

「何が？」

重苦しい沈黙に俺は謝罪の言葉を口にした。

「…お姉さんに軽い言葉を使いました」

すみません、と言うと、空は小さく声を上げて笑い、可愛いなあ
と呟いた。

「俺こそ、シスコンって呆れられると思ったんだけど？」

「うん、いや、まあ」

シスコンっていうか好きな人だもんね、とは続けられなかった。

「瑞樹はさ、女の子受け良いでしょ？」

怖くて紹介出来なかった、と冗談っぽい声音とは違い、切れ長の
双眸は笑えない真剣さだ。俺はうん、とだけ答えると、それ以上言
葉を続けられなかった。

「いやホント、興味ないんで！」

「勿体ない！勿体ないよキミ！キミならアイドルになれる！」

「ハタチ超えてからアイドルとかってマジないですから！ムリ！」

空の誕生日が来週に迫った週末。プレゼントを選ぼうと一人ぶらぶらしていた俺は、史上最強的なスカウトさんに捕まっていた。

腕を捕まれまたか、と振り返ると、ギラッギラに眼を輝かせた女が一人。これはナンパではない、スカウトだと思った瞬間に「アイドルになろう！」だ。

さらりと流して逃げようと思ったのだが、これがまたしつこい。まだ学生で親が厳しいと言え、いくらでも説得しに行つてやるというし、興味がないと言っても、直ぐに天職だと思わせて見せると。

スカウトは短く揃えられた髪をぐちゃぐちゃにして食らい付き、かれこれ十分は押し問答を繰り返している。

「今ね、事務所にカイが居るのよ！会いたいでしょ、カイ！」

「いやもう全然。ってか誰ですかそれ」

「パリコレからも声が掛かるような有名モデル！知らないの？！」
「興味ないんで。じゃ」

「待ってえええ！せめて見学だけでも！ね！」

警察呼びますよ、の一言で外したはずの腕を捕まれ、俺は小さく息を吐いた。

「見学だけで帰してくれるんですか？」

「も、勿論」

嘘だ、と思いながらもこのしつこさには正直感服した。 凄い情熱だ。

「約束、守って下さいね」

「君の方からカイと仕事したいって言わせて見せるわ」

物凄い自信である。

受けて立ちましょう、とにっこりと笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2194q/>

俺を好きになってよ！

2011年4月3日08時14分発行